

## 商学会賞・関マケ論文賞受賞報告

第11期関マケ 津田 琢也  
長澤 由美子  
西本 真志  
佐藤 優輝  
立松 宗磨

### ◆執筆論文の概要

私たち第11期関マケプロジェクトチームは、この度、三田祭論文「セールス・プロモーションのゲーミフィケーション——フロー理論に着目して——」において関東学生マーケティング大会（通称：関マケ。旧、十ゼミ）において「論文賞」を受賞し、また、学内においても、「慶應義塾大学商学会賞」を受賞いたしました。受賞論文の概要は、以下にご説明するとおりです。

ゲーミフィケーションとは、人を夢中にさせるゲームのメカニズムを応用し、ゲーム以外の分野で利用者の行動を促す手法です。本論は、夢中になる感覚を意味する「フロー」概念に注目してフロー理論を援用し、セールス・プロモーションのゲーミフィケーションにとって必要な要素とは何か、そして、そのような新しいセールス・プロモーションが消費者行動にどのような影響を及ぼすのかといった疑問に対して、独自の概念モデルを構築して、実証分析を行いました。分析の結果、6つの要素によって規定された「フロー」状態が、ゲームに参加する消費者が商品およびゲームに対して好ましい態度、ひいては、再来店意図や、1回当たりの消費量に帰着するということが見出されました。既存研究とは異なり、実店舗においてのゲーミフィケーションのメカニズムを描写したモデルを構築し、経験的に吟味することによって、今後のゲーミフィケーションおよびフローに関する研究の発展、また、ゲーミフィケーションを戦略として実際に取り入れようとしている企業に対して、有意義な貢献を成すことができました。



関東学生マーケティング大会で論文賞を受賞した11期関マケチーム

#### ◆執筆後記（第11期生 津田 琢也）

関東学生マーケティング大会に向けて執筆された我々の論文は、大会においては論文賞を受賞することができ、さらには慶應義塾大学商学会の商学会賞を頂くことができた。1つの論文で、2つの賞を頂けたことは、本当に幸福なことであったと思う。論文執筆活動を思い返せば、論文執筆が思うように捗らず、同期や先輩方、院生の皆様方、そして小野先生には多大な迷惑をお掛けしたことだと思ふ。そのようなつらい状況であっても、深夜オールナイトで、スポッチャで遊びつくしたり、笑いあいながら論文を最後まで執筆できたことは、このメンバー5人だからこそであったと思う。全力で駆け抜けた半年間、その過程で本当に多くのことを学ぶことができた。これほどまでに充実した時間を過ごせたことができた、もうそれだけで十分幸福なことであったと思う。まして、そのような充実した時間が2つの賞となって結実したことは、これ以上ない幸福である。このような体験をさせてくれたゼミに、同期に、先輩方に、院生の皆様方に、そして小野先生に感謝いたします。ありがとうございました。

#### ◆執筆後記（第11期生 長澤 由美子）

「ゲーミフィケーション」という、ゲームにまったく興味のない私にとっては、何のことかさっぱりわからないテーマで関マケの論文執筆は始まった。暗黒の夏休みを抜け、やっと進み始めた頃には、誰からも「関マケは締切に間に合わない」と言われていた。そこから、怒涛の追い上げをみせ、私は階段から落ちて腰を痛めるというハプニングを乗り越え、なんとか11月2日、私の誕生日に論文を提出することができた。最高の誕生日プレゼントだった。様々な人の協力があったからこそ、関マケで論文賞を、商学会賞を受賞できたのだと思う。小野先生の一声で、暗黒時代から抜け出し、商学会賞も手取り足取り修正点を指導して頂き、小野先生には本当に感謝の気持ちでいっぱいである。最後に、関マケのみんなは本当に自由人、遅刻魔ばかりで、集合時間を守って全員が集合したことはおそらく1度もないし、毎回誰か1人は欠けた状態で活動していた。でも、そのゆるい感じが私にはあったから最後まで頑張れたのだと思う。本当にありがとうございました。

#### ◆執筆後記（第11期生 西本 真志）

まずはじめに、今年度2つの論文賞を頂けたことに対して、小野先生を始め、多くの方々に改めて感謝申し上げたいと思います。皆様のご協力なしでは、決してこのような賞を頂くことは決してなかったと思うからです。4月に小野ゼミに入会して以降、何か自分の足跡を残そうと活動してきた自分にとって、このような2つの賞を頂いたことは、1つの結果を残すことができたという点でほっとしているというのが正直な感想です。しかしながら、この賞を頂くまでの過去、裏側では、論文を書き上げる過程のなかで、説得的であること、論理的であること、あきらめないこと、全力を尽くすこと、細部に徹底的にこだわり抜くこと、自分は非力であること、全力を尽くしても結果が出ない時があること等々、様々なことを学びました。これらの学びの経験も、自分にとっては賞を頂いた以上に貴重な財産となりました。チームで1つの論文を書きあげる中で様々なことを学び、結果として2つの賞を頂いた今、私はこれらを通過点と捉え、今度は卒業論文という成果物に全力で取り組み、結果を残すことにつなげたいと思っています。重ねてこの度はありがとうございました。

#### ◆執筆後記（第11期生 佐藤 優輝）

私は今、4足の草鞋を履いております。就活、アルバイト、テスト勉強、そしてゼミ。まあ、テスト勉強という草鞋は、明日のなんちゃらウォーリアーのなんちゃら幻想をぶち壊せば、履きつぶせるわけで。それが終われば3足になるわけだけど。大学時代は、「神は越えられない試練は与えない」的な感じの昔の偉人の言葉を胸に、やりたいと思ったことは精一杯欲張って取り組ませていただいています。まあ、悪く言えば、「全部中途半端人間」が私。そんな自分に嫌気がさして、「何かのエキスパートになりたいなあ」なんてのも、私が小野ゼミを志望した理由だったり。「論文執筆だけを精一杯頑張ろう！」的なことです。1足の、誰にでも誇れる草鞋を履きつぶしてみたかった、のだけでも、実際にカンマケでの活動では、そうはいきませんでした。アルバイトもカンボジア旅行もビジコン出場も教習所も。だから論文メンバーには感謝の思い一杯です。本当にありがとう。楽しかったよ。みんな今忙しいだろうから、あれだけれど、みんなと旅行行きたい。津田がずっと行きたいって言うてる、西本運転で箱根行って、ぼんとそーまのイチャイチャを見る会開催しよーよー。ねーねー。

#### ◆執筆後記（第11期生 立松 宗磨）

関マケ論文賞と商学会賞のW受賞。この結果を誰が予想しただろうか。他チームが順調に既存研究をレビューし、仮説を構築していった一方で、私たち関マケはどの既存研究をレビューすればいいかわからず迷走していた。先輩からは、期限までの論文完成が無理なのではないかとさえ思われていた。そんな中で私たちに光を与えてくれたのは、小野先生であった。それから苦労は絶えなかったが、勢いにのった私たちはどんどんスピードを上げ、論文を完成させた。関マケでは論文賞をいただくことができたが、商学会賞は一筋縄ではいかなかった。返却コメントは、「根本的改訂を要する」であった。修正・加筆に困った私たちであったが、ここで手を差し伸べてくれたのも、やはり小野先生であった。本文・コメントを何度も添削していただき、見事1度の修正・加筆で受賞することができた。この短い文章で表すことが不可能なぐらいの困難があった。しかし今思い返すと、それも全部良い思い出である。自分が大学3年生をこのように過ごすとは正直全く想像していなかったが、今後の人生に役立つ良い経験であったと胸を張って言うことができる。



発表後の打ち上げを楽しむ5人のメンバー